（番外編）もしCCAアムロが一年戦争にタイムスリップしたら

BLAUFALK

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

上層部が新規事業計画のハコだけ作り実務を丸投げ、現場との中間管理職ポジションに懲罰人事的に抜擢された主があまりのワンオペと帰宅困難で過労死。

そんな主は好きだったガンダムの世界に転生してしまった。主のセカンドライフは一年戦争以前から始まる。

地球連邦政府が発足以来、必ずしもひとつの政府が地球そして宇宙を支配することを喜ばしく思わない者は少なからず。ジオン独立戦争どころか地球各地で宇宙への移民抗議デモはては紛争テロに至るまで旧西暦時代と何ら変わらない血で綴られた歴史が綿々と続く。

彼は戦争は嫌いだ、しかし戦闘は狂気的なまでに好きだった。愚かにも続く上記を経て地球連邦空軍の中佐に登り詰めてなお戦闘機で第一線で戦うと我を張った。無論そんな組織としては横柄きわまることが出来るのは連邦の国力と人材が豊富であり指揮官にはもっともっと相応しい人物らがいたからだ。ゆえに万年中佐止まりのはずだった。

ただしそんなアタリマエに勝てる戦も、一年戦争が開幕。連邦宇宙軍に籍を置く同胞―戦闘機パイロット達が次々散り、さらにはコロニー落としによって特に太平洋側の連邦海軍は母港どころか帰るべき艦までも喪失。

事態は３月の第一次降下作戦から始まる。

目次

01 オデッサ撤退戦（前編） 1
02 オデッサ撤退戦（後編） 4
03 追われる敗軍（前編） 7
04 追われる敗軍（後編） 11
05 英国紳士（前編） 17
06 英国紳士（後編） 20
07 鹵獲ザク（前編） 24

０１　オデッサ撤退戦（前編）

ここのところひどく大雪が振り続くオデッサの空は晴れていた。なるほど大方スペースノイドにとって初めての地球。足場が悪くなるのを避け、降下には絶好の日和を選んだと言うわけだ…

そう独り言散るはこの俺、万年中佐でも構わず、同期らに出世を抜かれながらも空に在ることを選んだパトリック・ジョン・ローゼンバーグ５１歳。コールサインはＰＪ。

月の貨物用マスドライバーを転用した質量弾攻撃で大気圏外まで届くはずのミサイルやコロニー落とし阻止のためにやむ無く連邦軍が使用した核ミサイルの基地のことごとくが叩き潰されており―そう、現在オデッサ司令部が真っ青になりつつ出撃待機を命じたのは俺を含むＦＦ―３『セイバーフィッシュ』の部隊である。

各自がめいめいにロッカーで着替えし、俺もまたそれを済ませ愛機佇むハンガーへと向かう。

おお―見えるぞ、地平線スレスレに小さく見えるあの火球が…全部ソレなんじゃないか？

それは次第に大きくなりつつ、しかもこっちに向かってきているのは火を見る如く明らかである。原作知識においてジオンがこの第一次降下作戦をしてくるのはとうに知っていたが、やはり知識と目で見るのは全く違う。

かつ幾ら南極条約を結んだからといって敵軍を信用するほど甘くはない、それは長年戦地の空を飛んできたことから来る考えであった。

≪管制、こちらＰＪ。発進許可はまだか!?≫

≪ＰＪへ、こちら管制。駄目だ、輸送機の退避が先だ。各隊タキシングにて待機せよ≫

≪ち…クロウ隊各機、機体チェックは終わったか？この状況だ、いつでも発進できるようにしておけ。一つ目野郎満載のＨＬＶが迫っている≫

≪クロウ１、こちらクロウ２。ＡＡＭが使えないという話ですが、

何故我々に搭載指示を出したんです!?≫
≪こちらクロウ３、同意見です≫
≪同じくクロウ４、こんな重いもん持ってったって当たらないんでしょう?外すべきじゃないんですかＰＪ≫
ミノフスキー粒子散布下における誘導兵器があまりに脆弱となることは既に知られている。では何故か。
≪野郎ども、よく考えてみろ。敵さんが降下する前に散布できる機会があると思うか?戦艦でも降りてくるんなら別だがな、今はまだコイツは使えるはずだ…駄目だったら増槽よろしく棄てれば良い。おそらくミサイル基地を叩いたりしたのはこういう理由のはずだ≫
≪こちら管制、たった今滑走路が空いた。クロウ隊離陸せよ、後がつかえてる≫
≪了解!聞いたな野郎ども、一番槍は我が隊がいただくぞ。クロウ１、発進する≫
滑走路からＦＦ―３、そして別の滑走路からＦＦ―６『ＴＩＮコッド』が続々離陸する。しかし降下してくるＨＬＶのゆうに１００を数えさらに増えつつあるのに対し、上がった機数はあまりに少ない。せいぜいが１６個編隊というところであり、１個編隊が伝統の４機であることを踏まえれば明らかだ。
これはコロニー落としの豪州そして太平洋沿岸地域への被災地援助と同時に来るべきジオンの地球侵攻作戦に対し目標が不明であることから航空隊を分散させてしまったことにその理由がある。
≪…クロウ隊各機上がったな?よし、各機聞け。チャンネルを１４７に合わせろ≫
≪こちらクロウ２、了解……合わせました、どうぞ≫
このほかクロウ３、４も同チャンネルに合わせ、部隊間のみの交信に移る。
≪…気づいているだろうが、あまりにこっちの頭数が足りない。他の基地から増援が来るのかさえ分からんし、ここいらで近いワルシャワとベオグラードを含めたとしても無理だ≫
≪こちらクロウ３、それは…そうですがしかし、どうします!?≫

≪管制あたりでももう気づいてるはずだ、ミデアなりを先に逃がしたのも司令部がとっとと逃げるためだろうよ…奴さんが基地から十分離れたのを見計らって俺らも東へ逃げるぞ、地上部隊はどうやっても逃げ切れん≫

≪友軍を見捨てると言うんですか!?≫

≪バカ言え!これは撤退戦だ、鼻からそのつもりで出撃させられたんだよ俺たちは。…各機、燃料を使いすぎないよう気をつけろ≫

０２　オデッサ撤退戦（後編）

距離５０００…４５００…４１００…３７００…３４００

ＴＧＴとの距離が縮まっていくが、急に遅くなり出した。地表降下のために制動をかけているのだろう。こちらからはまだ対空砲火のひとつも上がってない様子を見るに地上もさぞ混乱しているのかもしれない。

≪タリホー！各機散開、増槽投棄し安全装置を解除しろ。一航過で出来る限り落とす、目標はデータリンクで指示した通りだ。スラスターを狙え。その後上へ逃げて俺のケツにつくんだ≫

部下に素早く指示を出し、ＨＬＶの尻すなわち目下制動をかけているそのスラスター部の破壊を狙う。この巨大な卵の形の物体をまともに撃破するなどＦＦ―３の搭載火器では相当骨が折れる。ＦＦ―３はミサイル付きブースターパックが非対応の地上仕様であり、両翼に懸架するＡＡＭはアクティブレーダー式が４発、赤外線誘導式が２発。ＦＦ―３Ｓと共通なのは機種の２５ｍｍ機銃である。

ではその質量と高度を利用し、制御不能にすればどうか。味方の上に落とすなという無茶な点を除けば画期的なアイデアだ。

ＡＡＭ等の搭載火器が少なく、ＦＦ―３より加速の優る友軍のＦＦ―６が先頭に躍り出る。一番槍を持って行かれ早々に１基のＨＬＶがスピンし落下していく。ただしもう１基には浅かったようで、ＨＬＶのハッチが開く―この場でＭＳ―０５を降ろすつもりだ。

今さら目標変更は出来ない、なおもＴＧＴとの距離は縮まる。レティクルが４基同時にロックし、１８００…１６００…今！

≪クロウ１、ＦＯＸ３　ＦＯＸ３≫

僚機と他の部隊も次々ミサイルを放ち、白煙が尾を引いて目標に吸い込まれていく。だが他の部隊は特段狙いを絞っている様子がなく、的が大きい分４発程度ならば命中しても爆散する様子はない。その点我が隊は目標の６割方は叩き落とした。みるみる地上へと刺さっていき、逃げ出そうとしたＭＳ―０５や兵員や貨物が空へ無軌道にバラけて墜ちていく。

双方の相対速度が速く、インメルマンターンの要領で上にギリギリ避ける。視界の端で何かが空に爆ぜていくのが見えたのは同時だった。

それでもＭＳ―０５や０６の何機かは射出され、それを横からかっさらっていく機があった。空軍には珍しい宇宙軍用の機体、ＦＦ―３Ｓで。そいつはＭＳ―０６を２機仕留めたが同時にブースターパックを掠めて引火、爆発の前に切り離した。同時にＦＦ―３Ｓの武装は機種のバルカン砲だけとなり、これ以上踏み留まるのは危険と判断したのか東へ方向転換し逃げていく。

≪各機、生きてるか？…２番機と４番機はどこだ？≫

≪クロウ１、こちらクロウ３。分かりません、こちらも手一杯で≫

≪駄目か…識別反応ロスト…管制、輸送機はどうか？≫

≪各隊持ち場にて奮戦せよ≫

≪管制？≫

≪各隊持ち場にて奮戦せよ≫

≪管制、こちらクロウ１。応答されたし≫

≪各隊持ち場にて奮戦せよ≫

≪くそ、逃げたか！≫

どう聞いても録音した音声である。偉いさんが俺らを殿にしたように管制の連中も逃げるつもりらしい。オデッサの滑走路はずいぶん遠くなったが最後のミデアが離陸していく様子に気づいた。ようやく地上が忙しく応戦を始めたようで味方に合図も送らず対空砲火を上げ始め、友軍のＦＦ―３が被弾。イジェクトシートが飛びパラシュートが開いたのは見てとれたが―撃ち漏らしたＭＳ―０５と０６、ＨＬＶが続々と上陸し、ワッパやＡＦＶが降りつつあるこの状況では降りられる場所などない。もはや敵中ど真ん中である。

ＭＳ―０６が後ろ向きに砲を撃ちながら逃げるタンクの砲弾を躱し、その手に持つ１２０ｍｍという恐るべき口径の弾をマシンガンとして軽々扱い、ただ為す術も無く撃破されていく。小石のようにジープが蹴っ飛ばされ、数バウンドのちに爆発。防衛戦のぼの字もなく破竹の勢いで友軍が各個撃破される。

≪クロウ1、中佐！微弱ですが、西２７５の方角、ヘビィ・フォーク級が撤退支援要請を受信しました≫
≪それだ！こちらクロウ1、この空域の全航空隊へ。クロウ隊はこれよりヘビィ・フォーク級の撤退支援に向かう。生き残った者は当隊指揮下に入れ、全速で離脱する≫
≪ウチの隊長が落とされちまったんだ、置いていけない！≫
≪ついてくる者だけでいい、もはや我々は帰る家を喪った≫
基地滑走路にＭＳ―０６が雪崩れ込み、それに敵のタンクやＡＦＶが続く。ハンガーの連中が逃げてくれたことを祈りつつ西へ急行する。

＊＊＊＊＊
結論から言ってワルシャワまでどうにか落ち延びた。無事に撤退できた者は非常に少なく、航空隊も基地の偉いさんもマッハ５で飛ぶ敵機戦闘機の餌食となり…確認する限り撤退できた部隊は以下の通り。

・ＦＦ―３　１１機（うち中破が１）
・ＦＦ―６　１機
・ミデア輸送機　３機
・ヘビィ・フォーク級　１隻（ただしブリッジ大破）
・６１式戦車　４１輌
・ラコタ　５２輌
・兵員輸送トラック　６輌

部下のクロウ３はケツにＡＡＭをきっちり２発食らって脱出する時間もなく空に散り、そして、中破したＦＦ―３が俺。無理だろう、どんな耐Ｇスーツを着込めばそんな速度に耐えられるというんだ。おかげで破片が右腕を抉り、愛機は右主翼と左尾翼が脱落。
とはいえ最終的な戦果としてはＨＬＶ３基、ＭＳ―０６を１機、ＭＳ―０５を１機、ＡＦＶを１３輌、ドップを１機というものとなった。

０３　追われる敗軍（前編）

深夜３時すぎ、負傷者収容と応急手当てのために建てられたテントのベットはまさに地獄絵図といった具合で方々からの呻き声の大合唱。こんなもん眠れるか。

右手を首に吊るしつつ俺も俺でこのザマよ。あまり深手にならなかったのは幸いだったがあろうことか神経をやってしまった。操縦桿を握りコンパネを叩くその手の人差し指と中指が非常にぎこちない。

一応この中では軽症の部類に入るが、それでも鎮痛剤の投与が効かなければこの合唱団の仲間入りとなっていただろう―

ふと、ベットの横に置かれた水の入った紙コップを取ろうとして…僅かに振動があることに気づいた。

外のディーゼル式発電機だろう、確かにそれなりに騒音がする。オデッサの兵舎にあった洗濯機は年代物のスクラップで深夜の使用が禁止になったほどうるさかった。いや新しいものにしろという話だが、軍隊の財布の紐は固い。苦しくてベットで寝返りを打つ者もいるので振動はそれかもしれない。

それにしても腹が減った。昨日の早朝の非常呼集とブリーフの時点で朝飯すらまだだった。昼食については食ってる場合ですらない。そして夕方なんとかワルシャワに辿り着いたがなんとオデッサだけではなく、小さな地方基地しか持たぬキエフとブカレストからも続々逃れた部隊が押し寄せ、結果、食事の配給など望めなかった。

一口飲んでまた一口。

空になったのでベットを降り給水器で水を汲む。

ん…、やたら液面が揺れてないか。

俺は床にコップを置き、それをじっと見…刻一刻と振動が大きくなっていくことに気づく。何だこれは。

テントを飛び出し、オデッサのある南東方角を見る。

昼と違い滝のような大雨が降り、非常に寒い。外の音がロクに聞こえないが…この月の光りさえ差さない夜中だというのにうっすらと

した灯りが何度か見える。
今頃撤退してくる友軍がいないとも限らないが万一がある。血に汚れたフライトジャケットを着、ヘルメットを被り走る。愛機はハンガーにあぶれ露天駐機。応急整備だけはしてもらっている。この基地には今元から所属する航空隊がおり、よそ者は自然、外に出てろというわけだ。

エンジン始動…すこぶる不機嫌な音がする。あまり慣れぬ左手で立ち上げと機体チェックを済ませつつ管制へあの灯りは何だと尋ね、ほかの駐機を避けながらタキシングに入る。管制からはこちらで異常は確認していないと返ってくる。
≪管制、こちらクロウ1。ミノフスキー粒子濃度はどうか？≫
≪中佐、タキシングは許可していません。当基地は最新の検出器を有していないため何とも。…いや、たった今基地南東の送電が止まりました。おそらく落雷かと。電力供給低下によりレーダー施設の稼働率が下がりました≫
≪いやいや、そっちの空を見てたが光らなかったぞ≫
≪…南東に近い監視塔に状況を聞いてみます、少し待って下さい≫
思い当たる節がある。それは闇夜の中でサーチライト片手に歩くＭＳ―０６のワンシーン。読みが外れるならばそれでよし、さっさとテントで横になろう…などと思っていたら
非常事態を報せるベルが押され、基地全体に警報が鳴る。
≪何があった!?≫
≪不明です、監視塔からの交信がありませんが、ベルは監視塔からのものです。カバーで囲われているため誤報のはずはありません！…中佐、状況確認のため離陸し空から南東の偵察を行って下さい、離陸を許可します≫
≪この暗さじゃ見えんわ、照明弾を頼む…出るぞ！≫
発進しすぐに足を畳む。旋回しつつ照明弾が上がるのを待ち…人影に物体？ヤバいぞ！監視塔の下にキュイだ！
やや離れて南東にはＭＳ―０５、サーチライトを持って森の中を進

んでいる。
≪タリホー！管制、監視塔の下に敵工作部隊を視認！すでに基地施設内に入り込んでいる模様。ＭＳ―０５を１機視認した≫
≪総員、戦闘配置！敵だ!!≫
６１式が慌ただしく起き、基地内を横切る。先手で空襲を受けなかったのはこの基地を制圧するつもりだからだろうか。
予想外に早い発見にＭＳ―０５が面食らったようで、慌ててサーチライトを振り回しながら脅威のメカニズムたるマシンガンを発砲する。
≪ドップがいなけりゃな！コイツでもやりようはある！≫
機体の増槽をＵＧＢに見立てて砲弾を躱しながらＭＳ―０５めがけてトス。当たる、いや外した!?応急処置で取り付けた右主翼がガタ付き、正確な狙いのはずが逸れた。あるいは左手に慣れぬからか…。
なおも空へマシンガンを撃ち続け、そして撃ち切る。マガジンチェンジで一瞬こちらへの注意が無くなった隙に背後へ回り込み、ＡＡＭ２発を誘導すらする必要なく真っ直ぐランドセルへ叩き込む。
ＭＳ―０５が突っ伏して倒れ、無力化を確認すると基地ではミデア輸送機が滑走路に入り離陸しようとしていた。
そこに別方角からバズーカの砲弾がミデアの機首に炸裂し、若干飛んでいたために滑走路へ落下。その残骸が滑走路を塞いでしまった。ＭＳ―０６が少なくとも３機以上、対する６１式戦車は山ほどいるが基地内のためあまり身動きが取れない。そのかわりひっきりなしに砲を撃ちまくって頭を出す隙を与えない。
一方こちらはその救援に向かう暇もなく、戦闘ヘリ２機が接近し有線ミサイルで捉えようとしてくる。舐めてくれる、戦闘機がそんなもんに当たるか！
上昇し、スプリットＳを描き、ヘリの横っ面を２５ｍｍ機関砲４門の一斉射で穿つ。一航過で２機とも叩き落とした、オッサンを舐めるんじゃない！
≪中佐！戦車部隊が頑張っていますが、一つ目相手にどこまで持つか分かりません！長距離通信を試していますが、ミュンヘンに繋がり

ません。貴機はミュンヘンへ飛び、大至急増援を要請して下さい！≫
≪バカ言え！何とかならないのか!?≫
≪貸したまえ、私はグリーン・ワイアット中将だ。ジオンのザクがこれほど脅威だとは…思い知ったよ。中佐、貴官だけが頼みの綱だ。ここを無事に撤退するために増援が必要なのだ。幸い部隊が集結しているおかげで火力でザクを圧しているがいつまでももつとは限らん≫
げぇ！ワイアットって、あのワイアットか！紅茶の!?なるほど宇宙がヤベエから安全な地上に逃げましょう、ただしポーズ的にそれなりに危うそうな前線に出張っておこうって算段か。で要するに滑走路塞がれて逃げられないし足の遅いヘビィ・フォーク級がズタボロにされた惨状を見て、安全に逃げるためにここで勝つってか!?なんつー英国紳士、肝の座り方がアレだ。炸薬満載の回転物投げつけんぞお前！
≪は…了解しました、直ちにミュンヘンへ飛び増援を要請します≫
悲しいかな、軍という縦社会。それも相手は将官、俺は佐官。役者が違いすぎる。

０４　追われる敗軍（後編）

ミュンヘン基地管制へ事を伝え、着陸許可を求める。降りて早々に司令部へ通され待たされること数分…何を悠長な、詳しく話を聞きたいだと？伝えた通りではないか。ようやっと勿体ぶって出てきた小太りのハゲは司令の従卒、階級は曹長という始末。

「当基地へようこそ。パトリック・ジョン・ローゼンバーグ中佐、司令は急用のため私がお伺いします。真夜中かつ長距離通信が使用不可のなかの所属不明機のため確認が手間取りました」

あぁ？急用だ？この朝方５時に急用もクソもあるか。昨日の夜にでも飲み過ぎたとか言うなよ、今は戦時だぞ。そして俺は丸一日メシ抜きだ。もしそれが理由ならマジで射殺も厭わん。だいたい何が所属不明だ、管制に伝えた通りだ。データベースなりで照会してんだろ。

「前置きは結構、それで。ワルシャワからの増援を要請したつもりだが。将も兵もいまこの時も戦っている、一刻を争うのだ」

まあＭＳ―０６のたった数機相手に山ほどいる戦車とヘビィ・フォーク級なら強行突破も出来るに違いないが。本当に一刻を争うのはそれで紅茶のマグカップにヒビでも入るものならばこの俺の、連邦軍内の居場所が確実に無いと予見するからだ。ＦＦ―３で敵の大編隊に玉砕特攻でもかませと命じられてはたまらんぞ。

「中佐、貴方はどこの所属でしょう？」

は？と呆けた口を一旦閉じ、今一度よく考えてみる。何度も言うが所属は明らかにした通り、オデッサ基地所属の航空隊だった―昨日までは。だがこの質問の本質はそうじゃないことに見当が付く。

「なるほど？しかし中将の命を受けた手前、手ぶらで戻るのは格好がつかないのですよ。貴官らとてそれは同じであるはず。それに私の乗機も応急修理のみでしてね。機体ぐらいはお借りさせていただけるのか」

「…いいでしょう、どうぞお好きに使って下さい。しかしくれぐれも貴方は空軍であることをお忘れなく、それが司令のお言葉と考え下

さい。カバーストーリーは用意してありますよ、御心配は無用です」
語るに落ちたな。これは策略だ。地球連邦軍と一口に言ってもその組織は連邦宇宙軍と地上軍で大きく２つ。そのうえ地上軍はさらに陸軍省・海軍省・空軍省に細分化され、それぞれが派閥を持っている。
空軍省についてはその航空機メーカーを抱え、そして紅茶が本来属するのは宇宙艦艇メーカーを抱える宇宙軍。宇宙に比べれば安全な地上に逃げ、その上で敵襲に遭っているならこれは僥倖。助けてくれなどと虫が良すぎる、そう言いたいのだ。だがそれは俺のクビと引き換えという条件が付く。ここまで来ておいて手ぶらで帰れるわけあるか、死ぬがよい。しかもまだ機動戦士ガンダムの本編前である。ガンタンクすらいねぇよ。
あれ？空軍てその戦闘機や爆撃機でＭＳ―０６に対抗できる手段を持つクセして、その実本編ではもっぱら脇役じゃん。某戦略ＳＬＧにおける活躍はともかく。ＦＦ―Ｘ７に関してはむしろ航空機というより大気圏でも使える航宙機でしかない。
読めてきたぞ、この件でレビル派（主戦派・Ｖ作戦強行派）の紅茶が空軍にヘソ曲げたんだな。
「では機体を貸していただく、整備士も何人か」
にやり、今コイツ一瞬口元歪んだ。まだ何か企んでやがるな…さっきカバーストーリーつったぞ。たとえば俺が離陸失敗事故やって滑走路が塞がり増援が送れませんでした、とか。
「いいでしょう。お気をつけて」
フン、そうはいかんぞ。この旧ドイツ領ミュンヘン基地は旧世紀の機体を用いた航空ショーを開戦前…少なくとも前年度まではやっていた。なんでも司令がコネと権力でモスボール保管された廃棄機体をかき集めて復元、現代のアビオニクスに換装し仮想敵機の名目で航空ショーで飛んで見せびらかすほどに。ではソイツを使わせてもらおう。どうぞお好きにと許可（※言質）は取ってある。
司令の秘蔵の品であろう機体を引っ張り出し、階級にモノを言わせてＡＡＭを４発とＵＧＢを６発、増槽２本を装備、チャフ装填させハ

ンガーから出す。識別登録済みとのことでまず意図しなければ誤射などするまい。
やはりというべきか、ＡＡ―ＧＵＮが滑走路を向いていた。しかしどうだ撃てるか!?
≪パトリック中佐！直ちに返したまえ！≫
シートで機体チェックをしていると濁声が聞こえてくる、さっきの下っ端じゃない。
≪誰だね？そして何故だ？好きに使ってよいと伺った≫
構わずに滑走路に入る。
≪儂のコレクションだ！儂のシーフランカーを!!≫
ああ、こいつが司令か。そしてコレクションと言ったな？アタリだ。だがここは軍隊。そしてコイツは軍用機。これがコレクションなワケあるかボケ！
≪これはこれは司令殿。急用とお伺いしておりましたが。ふむ、この機体は軍の所有物ではありませんか、随分手を加えていらっしゃるが。これ以上喋らないことですな。なに、空軍の顔に土つけるような真似はしたくありませんでして≫
≪…貴様、戻ったら折檻して―≫ ブツン
これ以上のお喋りは無用だ、半ば強奪さながら発進する。俺の長年空を供にした愛機も遠ざかっていく。尾翼にカラスをモチーフとした部隊エンブレムも、もはや部隊は俺を残すのみ。訓練飛行隊を出で、隊長のケツを追ってりゃいつの間にか俺なんかが隊長だ。
紛争、紛争そして今時の戦争。宇宙に上がったオヤジ（中間年齢層）は多く、それでも連邦の看板のもと唸るほど軍人はいた。だが結局、俺は機動戦士ガンダムの世界みたさに開戦直後が一番ヤベエ宇宙には上がらず、かといって紅茶みたく後々テロリストに狙われる将になりたくないのでそんな理由で空に在ることだけを選んだし、それがまだ許された。
＊＊＊＊＊
東の空に明るみが―時計は５：４０を刻むが朝日ではない。まだ暗く、雨が降り続いているにも関わらず。では何だというなら戦闘が続

いていることを意味する。管制へ通信を試みるが応答なし。
チ…遅かったか！
接近するにつれ基地が燃えていることが分かる、ただし戦闘のマズルフラッシュは基地から離れており此方、西側に移動している。
…ヘビィ・フォーク級を発見。あれを先頭にその図体で木々を薙ぎ倒し、６１式が続いている。そのわりに数が少ない、殿に殿を重ねつつ逃げているのだ。ＭＳ―０５が２機とＭＳ―０６が１機。
その頭上を飛び抜け基地の様相を確認する。地上に夢中なのかこちらのほうなど向きもしてこない。基地は燃料タンク始め管制塔、監視塔、兵舎、ハンガーを余さず爆破し、滑走路はひどくグチャグチャになっている。自爆なのか攻撃なのか、半々と言ったところか。擱坐した６１式の、中折れした主砲が空を向いている。
さらに南東から影…あれは、ドップ４機にド・ダイ４機！
やはり速い、とんでもなく速い！そして分かれた、俺に向かってくるのはドップ１機。なるほど旧型相手に全機でかかるまでもないと。ヘッドオンでその相対距離はみるみる縮まる。操縦桿を引き、次いで左斜め後ろに力を加えながら機体の方向は前進―すなわちバレルロール。放たれた敵機のＡＡＭを頭上に避け、失速させつつラダーを右へ。自機を追い抜いた敵機のケツを取りＦＯＸ２。
直線番長もいいところだ、かなり適当な狙いだったが刺さり１機撃破。
その様子に気づき３機が大きく旋回して此方を向こうとするが、その機体の機動性が非常に悪いことは撤退戦闘と今ので十分に分かった。だから今度はこちらが誘う。
敵機が旋回を終えこちらに振り向いて迫る前にＵＧＢ２発とまた増槽２本でもってドダイへ空対空爆撃をかます。ゴンという力強い音とともに機から放たれ容赦なくそののっぴろい無防備な図体の上に降り、叩き落とす。まさに七面鳥。
やっと追い縋ってきた。なるほど加速性能だけは歴然だ、減速性能も旋回性能も犠牲にして何処へ飛び立とうというのか、さては銀河か。しかしてロックオンアラートは鳴る。敵機が一斉にミサイルを

放ち、それをロールしつつチャフ・フレアを放出。
凄まじい揺れとベルトが体をメキメキ締め付けつつ一瞬にして位置を入れ替える。急減速とピッチアップ、すなわちコブラに近い機動を描き、オーバーシュートさせ無防備な敵３機のケツへＡＡＭ残り全発をくれてやる！
敵航空機は全滅。ＭＳも追撃を諦め、後退するがその前にちょうど俺がいる。ＵＧＢは４発。急降下爆撃の要領でＭＳ―０６へ２発、ＭＳ―０５の頭上へ各１発を見舞う。
１、２、３…１つ爆発してない。不発だ！
盾で防ぎ、完全に沈黙していないＭＳ―０６の銃口が上を向き―その胸が爆ぜる。歩兵がＴＯＷかロケットランチャーを放ったのだ。その証拠に仰向けに斃れたＭＳ―０６の胸部が小さく抉れたのみ。コックピットへ直撃したのだ。
＊＊＊＊＊
さらにあのＭＳ―０６へ追い討ちをかけようとするところを紅茶が制止し、ヘビィ・フォーク級とワイヤーで繋げてミュンヘンまで引き摺り回収した。
撤退しつつ工兵に路肩へＩＥＤを仕掛けさせ、さらにはハイウェイもぶち壊せとの沙汰で手伝わされ３０ｍｍでガンガン薙ぎ倒す。
例の司令の件はやはり気付いたようだ、がしかしそれにしても上機嫌だ。何だというのだ？
「やあ中佐！君に頼んで本当に良かったよ！聞けばオデッサでも活躍したそうじゃないか！ところで」
と言って例の司令に顔だけ振り向く。
「アレを少々運びたいのだが手伝っていただけるかな？」
などと抜かし俺の右手をガッシリ掴む。
ＨＡ・ＮＡ・ＳＥ
ああ、そうか。これは腹芸だ。空軍に感謝するよポーズを見せてミデア寄越せやオラと言っているのだ。安全なジャブローに退避しつつ、鹵獲したＭＳ―０６を土産に。
あの、紅茶の大将いや中将？そろそろ離してくれ、感覚がほとんど

…

フッと俺の意識はそこで手放す。そういえば腕に食らった際に出血はそれなりに出ていた。そこから休むまもなく戦闘続き、いわゆる貧血だ。

０５　英国紳士（前編）

「君に。我が故郷、最大の栄誉を与える」

片膝をついた俺の右肩、次いで左肩を剣で叩き、左右に翼を拡げ中央に地球を模した金属製の勲章とそれを収めたケースを手渡される。

言わずもがな、西暦時代までは続いてた勲章の授与である。対面で満面の笑みを浮かべるはワイアット中将。英国の伝統だコレ。記憶を辿ると王室が叙任する、有名どころではナイトの称号とかの。

いや王家も既に無いしアンタは王族じゃないだろとツッコミを入れたいがそれは野暮というもの。何せ左腕に報道の腕章を填めたフェデレーション・ポストという連邦系の新聞社を筆頭に、式典会場の左右にはカメラ、そしてラジオ放送局と言ったマスメディアが囲んでいる。

意味するはプロパガンダ。初戦より敗戦を重ねた地球連邦軍と地球侵攻によって政治基盤を喪いつつある欧州系政治家を焚きつけようというものである。オデッサ撤退戦で負傷しつつも夜襲を跳ねのけ、侵略軍であるジオンを返り討ちにしたエースパイロット…などと紹介されている。

よせやい。同じ空軍ならのちのちサミュエラとかリド・ウォルフとかテキサン・ディミトリーといったエースパイロットが出てくるし、そっちのほうが華々しい戦果を上げている。では何故かというならば話は１週間前に遡る。

＊＊＊＊＊

「は、は…ぶえっくし!!」ガァン!!

痛ってぇ！何かに頭をぶつけた！

くしゃみとともに勢いよくとても酷い寝覚めだった。真っ白なシーツで完璧に整えた病院のベットの上に。眼前にはベット据え付けの移動テーブルがあり、ナースが慌ててのける。目を白黒させつつ状況を確認すると掛け布団のシーツを交換しようとしてたようだ。

日付を聞けば３月１２日の昼間、オデッサから既に２週間近くが経っており失血による昏睡状態だったとのこと。そしてここは旧英

国領、ロンドン郊外の病院。なんてこった、紅茶の根拠地じゃねえか！1マイルでも前線に近い野戦病院にしてくれ…などとも言ってられない。

俺をわざわざ引っ張ってきたのは紅茶だろう。やはりＳｕ―３３を掻っ払ったのはまずかったか、空軍からつまみ出されたであろう今となっては。そこを拾われたんだろう、いやアンタのせいだが。

ラジオ放送を聞けば昨日キャリフォルニアベースが陥落したという。第二次降下作戦だ、間違いない。俺の知る機動戦士ガンダムの年表通りに事は進んでいる。

右手は…駄目だな、まだぎこちない。数時間は経ったか、しばらくしてチーズにビーンズにパンとレモンティーというこれまた英国風の質素な食事が運ばれる。病院食どこいった。空腹に唸る腹は味は二の次とにかく食べろと言ってくるので味は無視し、がっついて食べ、流し込むべくグイ飲みする。それが注意を疎かにしたのだろう、声を掛けられるまでいつの間にか目の前にいる男に気づかなかった。

「据え膳食わぬは、という古の言説もあるがね。もう少し品良くできんか…」

危うく噴き出す寸前で飲み込み、思いっきり噎せる。なんでここにいるんだ紅茶!?

「ゲッホゴッホ…失礼しました、お見苦しいところを。御身が此処に在らせられるとは露知らず、いえ…愚問でしたね、ワイアット閣下」

「うむ。理解が早いか。手際といい空軍には惜しい男ゆえ私のもとに置いたのだよ、あの旧き戦闘機の件は君の予備機だとはぐらかされたがね。そう言うならばとあれも引き上げさせておいた。これほど長く眠るとは思いもよらなかったのだが、むしろ今はその状態でありながら駆けつけてくれたこと、嬉しく思う」

紅茶的に俺へ借りを作ったと捉えたんだろう。空軍が邪険に扱ったからこそ、得ることのできた味方に。いや十中八九アンタのせいだろうが。つかアレ貰ってきたのかよ、なんというジャイアニズム。これで俺は空軍には戻れなくなったわけだ、いくら佐官であれ今後連邦軍で頑張っていくには紅茶の忠臣になる他に選択肢はない。陸軍も

海軍も勘弁だ、せいぜい扱き使われてＭＳにノミのように潰されるが関の山であろうし。
「閣下は多忙を極める立場。恐れながら、早速御用件を伺っても？」
まさか見舞い程度でわざわざやってくる殊勝な性格ではあるまい、大方モビルスーツに対抗する手段関連の話だろうが、何の要件かと訊ねる。ここでウッカリ戦闘機でも戦えないことはない、などと口を滑らせてしまったら機動戦隊コアファイターだの爆撃戦隊デプロッグに番組が変更されてしまう！それは駄目だ！絶対に!!
「お茶の用意を。紳士とはいつも余裕を持つものだよ。私はダージリンがいいな、君も同じものを？」
廊下に待たせているであろう従卒へ呼び掛ける。本題に入る前に待ったをかけたのは派閥に来る気があるかという確認の意があるのだろう。では。
「は。閣下と同じものを戴きます」
＊＊＊＊＊
…そしてその一週間後の今である。どうしてこうなった。必要性は分かっていても…うん駄目だな、文化に頭が馴染めていない。あれは何だったんだ、俺の一人相撲かよ。バシャバシャと写真を撮るカメラに微笑みを向けるがひきつっていないだろうか心配だ。やっと式典が終わり解放され、目からハイライトの消えつつある俺へ告げる。
「さて、待たせたな。本題だ」
余裕ぶっこきすぎだろ！

０６　英国紳士（後編）

「なあ中佐、君は怪獣映画を見たことはあるかな？」
いきなり振り出してきたな…
紅茶閣下と俺は式典会場を後にし、一旦の仮拠点及び欧州方面軍の仮本部としてあまりにも映画で見覚えのある物件に来ていた。
何を隠そうＳＩＳビルである。着いたときは流石に冗談だろうと疑ったし、機能しているなどという話を聞いたことがなかった。
それは半分正解で名所としてこの時代まで改装を繰り返して保っており、状態が良かったことから流用しようと下階では慌ただしく機材が搬入されている。
上階にある長官室のアンティークな机でゲン〇ウポーズを取る紅茶と同じく古めかしい応接セットの椅子に腰掛ける俺。
さて、振り出されたのはすなわちゴ〇ラのことだろう。ここは頭頂高１８ｍの物体が目の前で暴れればそうも思うかもしれないが、この宇宙世紀である。宇宙戦艦のマゼラン級や巡洋艦のサラミス級を有する我らが連邦軍がのしのし歩いて破壊光線を撒き散らすゴジ〇ごときなぞ問題にならない。ただし…
「怪獣映画ですか。ええ、その昔嗜んだことは」
「む？…昔というより古だが…まあそれはよい。知っての通り映画の中では既存兵器はあまり効果がある描写がない。さんざん暴れるだけ暴れ、壊すだけ壊して海へ還る。それだけだ…さて、何か気づいたかね？」
一頭程度ならともかく、それが大群でいたとしたら映画さながら蹴散らされるのみである。それに〇ジラは暴れ終わったら海へ還るが、そう、目下ジオンのＭＳは違う。あれと違って戦車や航空機からの攻撃が全く効かないわけではないものの、海つまり星の海へ帰らないのである。
「はい、これは侵略でありましょう。敵国にもっともダメージを与えるのはすなわち敵国への侵略です。そこが穀倉地域や資源地域であれ、敵国のリソースを収奪する戦略に他なりません。してＭＳにつ

いてはご存じの通り無敵の怪物ではありませんが、元来デジタルとネットワークの両面に支えられてきた既存兵器ではかなり苦戦を強いられるものと思います」
「うむ…同意見だな」
あれ、意外とあっさり納得したな？
「宇宙艦隊加えて航空機や戦車に至るまで戦闘教義そのものが覆されてしまったとも言える、ミノフスキー粒子下ではな。先日の撤退で数を束ねれば何とか出来ることは身をもって知ったが、地上の至るところで戦闘中の今、それが何度行えるのかは分からん。それで勝てば良いがその保証はない」
おお、逃げ回ってるように見せかけてよく観察している。ちょっとは見直したぞ紅茶…いやこの人咄嗟に腹芸を見せるぐらいは切れ者じゃん。ちょっと否かなり変人なのが残念だが。
「私は将軍の言うＭＳ保有論にはあまり乗り気ではないのだがね。だいいち君が戦ったように絶対に勝てない敵ではない。だがこの戦争に勝つためにはそれも曲げるべきか…その判断のために中佐、貴官を頼りたい」
え〝嫌。すっごく嫌。非常に嫌な予感がする。というか保守派つまり既存兵器派だったのか。てっきり最初からレビル派一択だとばかり思ってたのだが…ああ、脅威を身を以て知ることでレビル派へ加勢し、それでＶ作戦強行が通ったのか。では俺はどこに必要だ？
「は、小官で宜しければ。何なりと」
好奇心に勝てずオーケーしてしまった。まあ取り組むけど出来ませんでしたもアリ程度の事だろう。どうせ一佐官に重要な話は振ってこな…
「鹵獲したＭＳ―０６、ザクＩＩについてその兵器としての性能を評価したい。昨日やっと修復を請けた電気機器会社…名前を何と言ったか。ハービック社にもウェリントン社にも断られてたらい回しにされたのだがね、とにかく稼働状態にすることができたのだ。明後日それを行う、君にはそのパイロットをやってもらいたい」
出た無理難題。ＦＦ―３やＦＦ―６等の戦闘機はともかくしてモ

ビルスーツなんて動かし方なんて知らないぞ!?まま待て落ち着け、その性能評価のデータ如何で紅茶が腹決めるってことだよなコレ!?
　そんなことも気にせずＨＡＨＡＨＡと悪戯っぽく笑う紅茶。ここはＮＯと言えないが俺にできるとは思えないのでこう言う。
「…旧英国に縁ある閣下ならば、映画界が生み出したスターをご存じですよね？」
「うむ？……おお、あの映画か！無論知っている。随分これまた古きものだな？ふむ、秘密兵器のほうが良かったかな」
「潜水艇に変形する車も、ボールペン型の手榴弾も特段欲しいわけではありません。物は扱いきれる者が扱ってこそその秘密兵器たる性能を発揮するのではありませんか」
「そうは言うがね中佐、これは十分なハンデなのだと私は思うのだ。君ならば経験から多少操縦に難があろうとも彼ら相手には丁度良かろう。模擬戦に参加するのはこれから前線へ送られる予定で訓練中の部隊なのだ、デモンストレーションにもなると陸軍には話をつけてある」
　まあ…そう言うならどうにかなるかもしれん。問題は流石に今日は遅いので明日一日でどこまでどうにかなるかだが。
「了解しました。あとそれから一つお願いがあります、修復を請けた電気機器会社の担当者と…恐らくこちらも技術士官が立ち合っておりますでしょうか？その方々のサポートが必要です」
「それは心配ない、既に手引き書も修復に合わせて書かせている。…このファイルだ。君の部屋は下階に用意させたが取り扱いにはくれぐれも注意するように」
　マニュアルを渡された。数ページ程度しかなく簡素すぎて逆に不安になるがこれが上手く行かなければＶ作戦がお釈迦になり、ガンダムは大地に立たない。よくて砲撃戦士ガンタンクだろうか、いやそれも駄目だ。
　要件も終わったのを見計らい、敬礼をし退出するところを__呼び止められる。
「あの映画はテープ時代のものは最早見れなくてな、ディスク時代

のもののみは観たのだ。そうだ、今度時間が取れたならばウォッカ・マティーニを飲みながら語ろうではないか」
「それは楽しみですね、お付き合いさせて下さい」
「よい返事だ…さて私が最初に見たタイトルは何だったか、カジノロワイヤルの次だったと思うが」
「それは慰めの報酬ですね」
「む?…おお!そうだ、それだったな。私も歳だ、なかなか忘れることが多い。ではな」
なかなかユーモアなところがあると俺は紅茶に対する評を改めた。
さて明後日か…頑張ろう。

０７　鹵獲ザク（前編）

本日は３月１９日―

昨夜紅茶から無茶振りされて結局ほぼ眠れなかった。渡された薄い本こと、あまりにページの少ないマニュアル。それに挟まってた現在のＭＳ―０６の概略を読めば不安になるなと言うほうが無茶だ。

コックピットは半壊で修復を試みたものの、ドジ踏んで自爆装置が起動…と言っても爆発ではない。ブラックボックスとは分からず取り外そうとしたところ、リレーが働きサージ防護機器をバイパスして高サージ電流がコンソールパネル、ＯＳを完全に破壊してしまったとの事である。

やらかしたのはアナハイム・エレクトロニクスの欧州本社―一年戦争のちに巨大企業となるこの会社は一般家電品を主な商売としている一方、じつは公にされていないがハービック社の下請け的仕事もしている。

何故新兵器であるモビルスーツの修復をハービックとウェリントンがたらい回しにしたのか、その答えはその大手２社の命綱である戦闘機と艦艇にある。

ハービック社は主に北米キャリフォルニアベースで戦闘機の開発・生産をし、世界各地に整備工場を設けていたが第二次降下作戦による無血開城で目下トップ安の急降下中。

ウェリントン社はその点、この地上宇宙に唯一つしかないジャブローの宇宙船ドッグを独占しており、特に被害が無いように見えるがそうではない。モビルスーツという新兵器の登場により一週間戦争、ルウム戦役と商売である艦艇が鉄屑にされ、このままでは発注の打ち止めも時間の問題。

そして両社に共通するのは動くと動かざるとラインの維持コストが洒落にならない点であり、そのうえ天敵であるモビルスーツなんぞ見たくもない―ということと思われる。

で、修復はといえば技官主導で俺の愛機ＦＦ―３から強引にシート含め分解のうえ移植。ＯＳが丸っきり異なるものの電気機器メー

カーだけあって1週間の突貫で調整を完了したとのこと。特に核融合炉の自動制御も元々のＯＳが担っていたため調整に手間取ったらしく、ここだけ記述が他に比べて多い。このへんは読んでもあまり分からないため割愛する。

駆動系である流体パルスシステムは制御系とシステム電源が切り離されており、自爆を免れていたので記述がサラッと書いてあるのみ。ＭＳ―０６を外観で見た通り五体に駆動箇所がありそこが駆動するといった内容。

さて問題は―戦闘機と大いに異なる点として『動作パターン』という予め設定された挙動があることである。このパターンが入ったソフトウェアについてはコックピット破壊時の断線により自爆を免れていたことからそのまま流用した…とある。解析によれば歩行、走行、ジャンプ、武器の構え等であるとのこと。

これが戦闘機乗りの俺が扱えるのかが分からない。三次元機動と全く勝手が違う。宇宙ならともかく―いや頑なに宇宙行きを断ったため宇宙での操縦経験はないのでこれも未知数。もし戦場の絆をやっていれば多少マシだっただろうか…時間作ってでもゲーセンに行くべきだった…！

あとは実践あるのみということになるが慣熟など望める時間が全く無い。それが非常に不安な理由である。

時刻はＡＭ７時前を刻み、そろそろと支度して割り当てられた自室を出る。ビルのエントランスを仮食堂として柱に寄り掛かりつつ将兵らがホットドッグやビーンズのスープを食べている。この場で佐官なのは俺と、やはり情報部関連の場所であるからか０８小隊で見覚えのある女性少佐ぐらい。ただでさえメシマズに拍車をかける煙草の臭いの元として一発で分かった。俺自身喫煙者だが、流石に遠慮してもらいたいものだ。しかし下手に突っ込みを入れて火傷したくないので我慢する。

うぅ…やっぱりマズイ……味が薄いため醤油やマヨネーズといった調味料に溢れた日本、そしてセカンドライフとして育ったアメリカのバーガーがとても恋しい。マメッコーラのほうが幾分かマシだ。

あれはウォッカを割るには丁度良いがストレート飲みはマジで頭おかしいと思う。

＊＊＊＊＊

ＡＭ９時前、ラコタを借りて元ヒースロー空港跡、現連邦空軍基地に赴く。基地は鉄条網に囲われつつ、鉄条網添いの道路を行くと一角に足場を組んでシートで覆った場所が見える。さながら函館のＭｉｇ―２５のようだ…あれよりはかなり大きく、いや、ＭＳ―０６の丈より２倍くらいは縦に長く、横に１．５倍長い。高さはだいたい８ｍ程だろう。

当然ハンガーはあるもののやはり空軍にとっては厄介者のようでどうやら使わせてくれないらしい。それでも敵国の最新鋭兵器であることから衆目に晒されまいと隠したつもりのようだが却って目立っている。

道路には野次馬やどこかの背広の連中がカメラを持ってその姿を納めようと張り付いている、もう何日目なのだろうかは知らないが非常に邪魔くさい。

ゲートで手続きを済ませるが明らかに下士官の面々からの嫌な視線が射すのを感じる。この基地の大将でもない偉方が来る理由なんぞ唯一つ、モビルスーツしかないためだ。俺はニュータイプではないと思うがむしろその視線に気づかなかったらあまりに鈍すぎると思う。

だがそんなもん気にしてる暇はない、とっとと通してもらってＭＳ―０６と対面するため直行する。

＊＊＊＊＊

「お待ちしておりました！この機体についてのファイルはお読みになりましたか?!」

ええっと…どちら様？

到着して開口一番のご挨拶である。うーむ…士官か、目がギンギンである。見た感じ三十路か四十路手間だが原作キャラにこんなのいたっけ…？

「ワイアット閣下からね、昨夜受け取って読んだばかりだ。まあな

んだ…あとはレッツトライというわけだ。ジョンとでも呼んでくれ、貴官は？」
「は、はあ…ではジョン中佐と。小官はフランクリン・ビダン中尉であります」
顔には出さないが内心ギョッとした。ガンダム屈指のダメ親父の一人。こんなスマートな体型じゃなかったはず。顎の肉もそれほど出てないし精悍な印象がある…まそれは大した問題ではない。
「さて、時間は非常に少ない。フランクリン中尉、早速だが要約して頼む」
「はい。鹵獲した本機ＭＳ―０６Ｆ、ザクＩＩＦ型はジオンのものと区別するためにグレーとダークグリーン、動力パイプにイエローを配色しております。機体チェックについてはまだマニュアルが書き上がっていませんので省略します。起動済みですから、まずは立たせてみましょう」
「左肩が赤いが…？」
「左肩については対艦・対戦闘機を主眼としていると思われる本機にしては不可解な装備であるため塗りわけました…決して趣味で塗ったわけではありません」
言いつつ横たわっているＭＳ―０６Ｆに乗り込み、マニュアルを読んで覚えた操作を実行して起き上がって、立たせる。足場との余剰スペースがあるおかげでぶつからず、このまま寝かせることも可能だろうが…
「次は？」
「次は歩行してみましょう、その場で足踏みを」
こちらも操作を行い、その場で右足を上げ下ろし、左足も同様に。腕もそれぞれ振る…なるほど素直なマシーンだ。何よりコックピットレイアウトが元愛機のものを流用しているのでグラスでない点と操縦桿が増えている点以外は落ち着く。
こんな調子で次は立ち膝、次はメインカメラの移動、次はマシンガンを構えた想定で構え、次は右肩のシールドの構えと基本動作を行っていく。

愛機から大きく変わったのはレーダー有効範囲である。愛機のそれはミノフスキー粒子下を想定していないもので非常に広く、かつデータリンク前提のものだったが、このＭＳ―０６Ｆはレーダー範囲が非常に狭い反面、ミノフスキー粒子下の使用に耐え得るものとして設計されている。なるほどそうきたか、ジオン脅威のメカニズム…

その他演習場所のマップ情報インストール等を行って本日は切り上げた。これはいけるかもしれない。